

織田信長

坂口安吾

青空文庫

死のふは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりをこすよの

——信長の好きな小唄——

たてりさきようのすけ
立入左京亮が綸旨二通と女房奉書をたずさえて信長をたずねてきたとき、信長は鷹狩に出ていた。

朝廷からの使者は案内役の磯貝新右衛門久次と使者の立入とたった二人だけ、表向きの名目は熱田神宮参拝というのである。

信長へ綸旨と女房奉書をだしては、と立入左京亮から話を持ちかけられた万里小路大納言これふさ惟房は、おまえ大変なことを言う、さても、困った、困った、と言った。

信長という半キチガイの荒れ武者がどれほど腕ツ節が強くて、先の見込みのある大將だか知らないけれども、目下天下の権を握っている三好一党と、その又上に松永弾だんじょう正という蛇とも妖怪ともつかないような冷酷無慙なジイサンの睨みが怖い。まったく弾正久秀という奴は蛇も妖怪も及びがたいジジイだけれども、たまには米もたらふく食いたいし、冬には温いフトンも慾しいじゃないか。雲の上人とは、よく言った。雲の上へまつりあげ

られて、薄いフトンで寒風をしのぎ、あるなしの米をすすって細々とその日のイノチをつないでいるのである。大納言のみならんや。上皇も、天皇も、そうなのである。

これは後日の話であるが、信長が天下を握って、御所を修理したり、お金を献上したり、色々と忠勤をつくして朝廷の衰微を救ったという。このとき、信長が京都の町民に米を貸して、その利息米を朝廷の経済に当てる方法を施した。この利息米のアガリが大体一ヶ月に十三石ぐらいであった。十三石の半分を朝廷で細々とたべる。半分を副食物や調味料にかえる。信長が衰微を救ったという。救われて、ようやく、これぐらいのもので、雲の上人は、まったく悲惨な生活であった。

天皇は皇子皇女をたいがい寺へ入れる。皇女の方は尼だ。関白も大納言も、そうだ。足利將軍もそうだ。子供は坊主や尼にする。門跡寺、宮門跡などと云って、その寺格を取引にして、お寺から月々年々の扶持ふちを受けるという仕組であった。そのほかには暮しの手だてがなかった。

万里小路大納言惟房も、松永弾正という老嫗まむしの目玉は怖い。然し、お米をたらふく食べてみたい。だから、こまった。大変なことになった、困った、困った、と言った。

けれども、煩悶しながらも、筆をとって、二通の綸旨をかいだ。上じょうろう 藤房子が女房奉

書をかいた。これを立入左京亮に渡しながら、あゝ、大変なことになった、こまったこまった、と、まだ大納言はつぶやいていた。だから、その晩は一睡もできない。立入左京亮と、道案内の磯貝まで、心痛になつて、やつぱり一晩ねむれない始末であつた。

翌日早朝、天皇は帷房を召して、上臈やおまえ方の心づくし、うれしく思う、この上は念を入れ、分別の上にも分別して、あくまで隱密專一にはからうようにと言つて、信長へ手ミヤゲの品をあれこれお考えになる、あんまりクドイのはいけないでしょう、道服はいかゞ、よからう、ときまつて、使者はひそかに出発した。

清洲の城へ直接信長を訪ねるわけには行かないから、磯貝の知音の者で、信長の目附をしている道家尾張守をたずねて行つた。そのとき、信長は鷹狩に出ていたのである。

鷹狩の帰りに、信長は道家の邸で休息して一風呂あびて帰城するのが習慣であつた。おつつけ信長も参るでしょうから、まずお風呂でも召して旅の疲れを落して下さい、と、二名は入浴する。そのとき左京亮は綸旨と奉書の包みを道家に手渡した。道家は包みをおしいたゞいて、手を拍^うつて、あゝ、ありがたいことだ、天下は信長公のものとなつた、信長公も満足であろう、と、それから急いで女房の部屋へとんで行つた。

彼の女房は安井と云つて、信長が大変目をかけてくれる才女だ。女房のおかげで、亭主

の方も信長の覚えがめ度たようなことでもあるから、コレコレ、すぐに髪を結い拵え衣服をととのえて、殿のお帰りを待ちなさい、これこれこういうことで、いよいよ天下は信長公のものとなった、この包みが、ありがたい綸旨二通と奉書なのだ、こうしては、おられん、さあ、いそいで、支度々々、め度たい、ありがたい、と云って、むやみに一人でテンテコ舞いをしている。

信長が戻ってきた。いつもの通りさっさと湯殿へ行く。道家がそれを追いながら、実はこれこれにて、朝廷の使者が見えております、ア、そうか、と云って、信長は風呂の中へとびこんで、湯ブネから首をだして、勅使のことを色々と質問し、新しい小袖の用意はあるか、ございますとも、それはもう用意に手ぬかりはございません、せっかく天皇様が日本国を下さると仰おつしや有るのですから、と、道家は日本国をもらった、もらった、とウワゴトみたいと言っている。それで信長もお風呂でバチャバチャ水をはねちらして、上キゲンであった。

然し、別に日本国の支配を命じるというような、たいした綸旨ではなかった。

お前も近頃武運のほまれ高く、天下の名将だとその名も隠れなく請人の崇拜をうけているそうであるから、ついては朝廷に忠義をつくし、皇太子の元服の費用を上納し、御所を

修理し、御料所を恢復してくれ、こういう意味の綸旨であつた。

皇室の暮しむきの窮状をなんとかしてくれ、というだけのことだ。まあ、借金の依頼を
一とまわり大きくしたゞけのようなものだが、これだけのことで、朝廷から、頼みをう
ける、頼まれるだけの実力貫禄というものが具わつたからのことで、いわば実力の判定を
得たようなものだ。

信長はミヤゲにもらつた道服をきて、左京亮と盃をいたゞき、二通の綸旨をいたゞいて
元氣百倍、これから近隣を片づけて、それから天下を平定いたしますから御安心下さい、
まず、三日五日ほどユツクリ泊つて行つて下さい。先は天下ひらける前祝い、雁の汁に鶴
の刺身、長臣五名をよんで酒宴をひらく。

朝廷へも同じ縁起の品物をと、翌日からセッセと狩をして、雁と鶴をしこたま捕つて、
金子きんすに添えてミヤゲにもたせて歸らせた。

そのとき信長は三十四だ。信長は野良犬の親分みたいに、野放しに育つた男だ。誰のい
いつけもきかず、マネもせず、勝手気ままを流儀にして、我流でデツチあげた腕白大将で
あつた。腕白大将あのをという奴は、みんな天下一というようなことを、いと安直に狙う。

丹波の桑田郡穴太村あのをの長谷はせの城守、赤沢加賀守が関東へ旅をして鷹を二羽とめて、帰

途に清洲の信長を訪ねて、お好きの方を進上するから一羽とてくれと云うと、信長は喜んで、や、こゝろざし至極満足、じゃ、貰うぜ、天下をとるまで預っておく、お礼はいずれ、その折に、と言った。田舎小僧め、大きなことを言っていやがる、と人々は大言壮語をおかしがったが、信長そのとき二十八だ。天下布武という印章をつくって愛用し、天下第一の情熱を日常の友としているが、その野心は彼に限ったことではない。

天下一の野心ぐらいは、餓鬼大將は誰でも持っているものだ。けれども、自信は、それにとまなうものではない。むしろ達人ほど自信がない。怖れを知っているからだ。盲蛇に怖じず、バカほど身の程を知らないものだが、達人は怖れがあるから進歩もある。

だから、自信というものは、自分でつくるものではなくて、人がつくってくれるものだ。他人が認めることによって、自分の実力を発見しうるものである。このように発見せられた実力のみが自信であり、野心児の狙いやウヌボレの如きは何物でもない。

信長は我流でデッチあげた痛快な餓鬼大將であつたが、少年時代に、短たんそう槍の不利をさとして、自分の家来に三間半の長槍を用意させたほど用心ぶかい男であつた。つゞいて鉄炮の利をさと、主戦武器を鉄炮にかえた。これが彼の天下統一をもたらしたのだが、この要心と見識の裏にあるものは怖れの心だ。恐らく、怖れの最高、絶対なるものである。

かかる信長に、三度や四度の戦勝が、まことの自信をもたらしてくれるものではない。信長には持つて生れた野育ちの途方もないウヌボレがあった。それと同量の不安があった。このウヌボレをまことの自信に変えるためには、不安と同量の、他人による、最高、絶対の認められ方が必要であった。

信長の家来たちは、餓鬼大將が、どうやらホンモノの大將らしいところもあると思ったが、半信半疑なのである。

清洲から五十町ほどの比良の城の近所にアカマ池というのがある。蛇池という伝説があり、三十町も葭よしの原ツパのつゞいた物怖しいところである。

正月中旬というからまだ寒い季節であるが、安食村の又左衛門という者が暮方アカマ池の堤を歩いていると、一抱えほどの黒い胴体が堤の上に取り、首は堤をこえて池の中へもぐっている。人音に首をあげたのを見ると、鹿の顔みたいなものに目玉が星のように光り、紅の舌がこれも光りかゞやいて、ちようど人間の掌をひらいた片腕みたいにチヨロチヨロ燃えてでている。驚いて逃げて帰った。

十日ほどして、この話が信長の耳にきこえた。直ちに又左衛門を呼んで話をきき、その翌日、近隣五ヶ村の百姓を召集、数百のツルベをならべてアカマ池の四方から水をかいだ

したが、四時間ほどかゝっても、ヘリメが見えない。では、よろしい、オレがもぐつて見て来る、と、フンドシひとつになり、御苦勞様につめたい水の中へ、口に脇^{わきぎし}差をくわえて、もぐりこんだ。まんなかへんで、一生ケンメイ、プクプクともぐつてみたが、蛇にくわさない。オレじゃア、もぐり方が足りないのかなと、オカヘあがつて、鵜^{うぎえもん}左衛門という水泳の達人に、おまえ、もぐつてみる、やっぱり蛇にぶつからないので、ヤレヤレ、おらんじやないか、と清洲の城へひきあげた。これが二十九の信長だ。

こういう実証精神は信長の持ち前である。ワリニヤーニのつれてきたエチオピアの黒人をハダカにして洗わせて真偽をためしたり、無辺という廻国の僧が、生国無辺と称し不思議の術を施すときいて、呼びよせて化けの皮をはいで追放した。追放後も婦女子をたぶらかしたことをきいて、国々へ追手をかけてヒツ捕えて斬りすてた。

人間の妖術の化けの皮ははぐことができたが、当時にあつて怪獣、大蛇の存在は、信長とても否定のできる筈はない。否定どころか、むしろ存在を信じていたから、見たくなつて飛びこんだ信長であつたに相違ない。その旺盛な好奇心、実証精神は話の外で、まったくイノチガケであり、人にはやらせず、まず自分がフンドシ一つに短刀くわえてジャブジャブ冬の水中へもぐりこむとは、見方によつてはキチガイ沙汰である。いわゆる日本流の

大名や大将のやることじゃない。家来や百姓は、イノチガケの凄味に舌をまいて怖毛おぞけをふるったかも知れないが、信長の偉さの正体は半信半疑で、わからなかったに相違ない。二十九といえば、もう老成した大人というのが当時の風であるのに、この大将は五ヶ村の百姓に水をくませて、水のヘリメが見えなくて、それではと、自分ひとりフンドシ一つで水中へもぐるのである。

これも、二十八の年である。にわか八十人の家来をつれて、京都へ旅行した。なんのための旅行だか、誰にも分らない。四隣はみんな敵である。よき力モよ、ござんなれ、と岐阜の斎藤が数十名の刺客に後を追わせた。たまたま、これに気付くことができたから、信長は刺客の泊っている京都の宿屋へノコノコでかけて行って、汝ら、の分際でオレを殺せるつもりとはバカな奴らめ、今、とびかゝって刺しに来てみよ、と云って睨みつけた。刺客どもは顔色を失い、ふるえあがってしまったが、京きょう童どうはこれをきいて、大将のフルマイとは思われぬという者と、若大将はこれだけの血気がなくては、という者と、二派の批評があつたそうだ。

信長は京都、堺を見物していたが、雨降りの払暁、にわかに出立、昼夜兼行二十七里の山径やまみちをブツとばして帰城した。この理由も、家来の誰にも分らない。ひきずり廻され、

アツと驚かされてばかりいる家来どもにも、ウチの大將は偉いのか、半キチガイの乱暴者にすぎないのか、信長が三十になつても、まだ確たる見当はつかないのだ。

どうやら美濃を平げ、宿敵齋藤氏を岐阜から追つ払った。信長、ときに三十四。然し、まだ、後には信玄という大入道がいる、謙信という坊主もいる、北条もいる、いずれも齋藤などとはケタの違う名題の戦争名人である。近いところに六角、朝倉、浅井がいるし、三好一党、松永弾正という老蝮もとぐろをまいて威張っている、毛利もいる、却々もつて生来のウヌボレ通りに、確たる自信が持ちうるものではない。

そこへ朝廷から綸旨がきた。先ず、借金をひと廻り大きくしたゞけの至つて雄大ならざる綸旨であつたが、ともかく、信玄、謙信なみにほゞ近づいた天下何人かの大將の一人の公認は得たようなものだ。

信長も始めて多少の自信を発見したが、然し、さしたる自信では有り得ない。朝廷とは何ものであるか。足利將軍家といえども朝廷によつて征夷大將軍に任ぜられておところの、しかして彼の父も朝廷によつて、ようやく弾正に任ぜられたところの、日本の第一の宗家である。とはいえ、現実には朝廷は虚器であり、足利將軍は老蝮の松永弾正の一存によつて生かしも殺しもされ、天下の政務は老蝮の掌中にある。

繪旨といえは名はよいが、その真に意味するところは、たゞもう寒々と没落の名家の悲しき、哀れき、みじめさのみ漂う借金状ではないか。皇子の元服の費用を用立てゝくれよ、料地は人にとられて一文のアガリもないから取り返してくれよ、御所が破れて雨がもり寒風が吹きすさんでも修理ができないから、なんとかしてくれよ、信長を感奮勇躍せしめるよりも、哀れきに毒気をぬかれる方が先である。

もとより、信長の慧眼は、虚器の疎すべからざる、その利用価値を見ぬいてはいた。然し、繪旨の名による体^{てい}のよい借用状、徴発令に、現実の大きな実力がないことは分明である。それによつて信長は、ともかく天下への自信の発芽を認めることはできたが、まことの自信を持つことはできなかったのだ。

それから、一年すぎた。足利最後の將軍義昭が彼にたよつてきた。それと前後して、老蝮の松永弾正が、信書をよせて、信長が兵を率いて上洛するなら、自分も一肌ぬいで助力する、あなたこそ次代を担い、天下に号令すべき大将だと、うまいことを言つてきた。

天下の執政たる悪逆無道の老蝮もたしかにヤキがまわつてはいた。主人に、主人の主人に叛^{そむ}かせ、その主人の子供を自分が殺して主家を乗とり、公方^{くほう}を殺し、目の上のコブを一つずつ取つて、とうとう天下の執政にとぐろをまいて納つたが、このやり方では味方がな

い、味方が同時に敵でもある。公方を殺してからこの数年は、もっぱら味方の三好三党と仲間われの戦争に追いつ追われつ、おかげで奈良の大仏殿に放火して焼いたり、堺へ逃げて、あやまつたり、さすがの老嫗も天下の政治をうツちやらかして、逃げたり、だましたり、夜討をかけたり、つまらぬことに頭から湯気のたつほど忙しい。

然し、さすがに老嫗であつた。彼は信長を見ぬいた。彼は次代を知り、世代の距りを知つていた。天下の執政などと実質的ならざる面目にこだわらず、次代の選手に依存する術^{すべ}を心得ていたのだ。實力失せた先代の選手を押しつけ殺して自分の世代をつかみとつた彼は、次代に依存する賢明さを、自らの血の歴史から学びとつていた。

それにくらべれば、足利義昭の信長に対する依存の仕方は、確たる定見の欠けたものだ。生家の地位を看板に依存を身上とした義昭は、兄の將軍が松永弾正に殺されて以来、逃げのびて和田惟^{これまさ}政にたより、六角義^{よしかた}賢にたより、謙信に助力を乞い、武田義^{よしむね}統にたより、朝倉義景にたより、手当り次第にたよつた。彼の一生は依存の一生で、誰彼の見境もなく、人物への信頼も信義もなかつた。利用すれば、よかつたのである。

利用は、又、信長自身のお家の芸でもあつた。然し、まことの悪党というものには、ともかく信義がある。信長は悪党にあらず、と言うなかれ。彼は悪党である。一身をはり、

投げすてているではないか。賭場のアンチャンの二セ悪党とは違う。ホンモノの悪党は、悲痛なものだ。人間の実相を見ているからだ。人間の実相を見つめるものは、鬼である。悪魔である。この悪魔、この悪党は神に参じる道でもある。ついにアリョーシヤの人格を創造したドストエフスキーは、そこに参ずる通路には、悪党だけしか書くことができなかったではないか。

老蝮の弾正も、信長も、悪党ぶりには変りはない。老蝮は、主家を乗とり、公方を殺したが、信長は殺す必要なく自立できただけのことで、信長の方が人を殺すにむしろ冷酷無慙であつたろう。

老蝮は、一生を傍若無人の我流で押し通したこと、信長と好一對、百二十五まで生きてみせると称し、延命の灸をすえ、手当をすれば何でも長命できるものだど、苦心サンタン松虫を三年飼いならしてみせた。

老蝮は蝮なりに妙テコリンな信義があつた。そして、信長は義昭の心を信じなかったが、老蝮の信義を信じていた。二人の悪党の友情と、老蝮の信義がどんな風に妙テコリンなものであつたか、追々明かとなるであろう。

老蝮の信長依存の魂胆は、信長の自信に恐らく最大の安定を与えた。そして依存の真実、

老虬の信義の眞実を信ずることによつて、老虬の依存を、信義を眞実なものたらしめしめたのだ。かれを信ずることによつて、信長は老虬に勝ち征服したのである。

老虬は足利義昭の兄の將軍を殺し、その母も焼き殺した。次兄も殺され、義昭のみは逃げのびて危いイノチを助かつたのだ。老虬こそは義昭のフグタイテンの仇敵であつた。義昭は都を追われ、天下の政務は老虬の掌中にあつた。

義昭は誰彼の見境もなく人にすがつて將軍家再興に奔走したが、將軍家再興の日は、憎むべき老虬への復讐の日であつたのだ。ついに信長の助力によつて、義昭は京都を恢復し、老虬の軍勢を蹴ちらした。彼は老虬を八ツ裂きにすることを得たか。否、否。信長が老虬をゆるしたのである。すでにその日を予想した老虬は、自ら張本人となつて信長を京都に手引きしていた。世に裏切りということがある。知らないうちに主を売り味方を売るのである。老虬は味方を売った。然し、主を売ることではできなかった。なぜなら、彼自身が総大将であつたからだ。総大将の裏切りなど、いうことが有るべきものではない。裏切りにあらず、それを降参というのである。ところが、老虬は、降参といえ降参、裏切りと云えば裏切り、なんとも得体の知れない形で始末をつけているのであるから、何事もこの老虬の手にかゝると奇々怪々な形になつてしまうのである。彼は上洛の信長軍に負けて逃げ

のびて降参したが、敗北して逃げる何ヶ月も以前から、とつくに信長に降参して、自らその上洛をすすめていたのであった。

降参した老蝮は、さっそく信長を訪問して、京都の治安はこうされたらよろしかろう、など、色々献策した、が切支丹^{キリシタン}の弾圧は必要大切でござるなどと云ってバテレンどもを怒らせた。

こうして、義昭は老蝮を八ツ裂きにできなかつたが、ともかく念願の將軍位につくことができた。そのとき、信長依存の交渉に立ち働いた義昭の二人の重臣がいた。一人は正直者の和田惟政であり、一人はインテリ兵法家明智十兵衛光秀であった。そして光秀は義昭の推挙によつて信長の家来となつた。

こうして、信長という悪魔の天下は、蝮やら曲者やらのうごめきの上に、魔法のランプの一夜の城の如くに忽然として現れてきたのであったが、そも、信長とは何者であるか、これこそは、当時にあつては、さらに大きな謎であつた。



信長とは何者であるか。家来にも分らない。彼を育てた忠義一徹の老臣は、餓鬼大将のタワケぶりに絶望して、自殺した。

餓鬼大将はケンカだけは強かった。ケンカの稽古は大好きだ。そして、当時流行の短槍よりも、長槍の方が有利であると見ぬいて、自分の家来に三間半の長槍をもたせたほど、幼少にしてケンカの心得にレンタツしていた。四月から十月まで河に入りびたって水練は河童の域に達し、朝夕は馬の稽古、弓を市川大介に、鉄砲を橋本一巴に、兵法を平田三位に、これが日課で、外に角力すもうと鷹狩は餓鬼大将の時から死に至るまでの大好物、天下統一の後もハダカになって小者と角力をとっていた男であった。

ケンカ達者の餓鬼大将は、その要領で戦争して、まア、なんとなく、勝っていた。家来たちには、そうとしか思われなかった。

信長は今川義元を破って、バカ大将、一躍して天下疑問の名将に出世したが、家来たちには、偶然の奇蹟、まぐれ当りという疑惑が、知らない他人たちよりも強く残って頭から放れなかった。

今川義元は東海の重鎮、名だたる名将であり、天下統一の万人許した候補者であった。その家柄は足利につぐ名門だ。これにくらべれば、信長は、小大名の奉行の倅せがれにすぎず、

腕ツぷしにまかせて、主家をつぶし、同族を倒して自立した田舎のケンカ小僧にすぎないのだ。

今川勢四万の大軍の攻撃をむかえる織田勢は三千そこそこ、出て戦えば一つぶしであるから、軍評定の重臣たち、満場一致、清洲籠城ときまったが、餓鬼大将は、たった一人、断々乎として反対した。そのとき信長は、勝負は時の運だよ、と言った。彼には、それが全部であり、そして、それだけで、よかつたのだ。なぜなら、彼はなすべき用意はしつくしており、そしてイノチをかけていた。してみれば、彼にとっては、あとは運がすべてであつた。人為のつくされたとき、あとの結果は運という一つの絶対に帰する筈だ。そこには悔いはないのである。百万人の幾人が、自若としてかゝる運を待ちうるであろうか。

織田氏の所領にくいこんで、今川方の大高城があつた。今川軍は織田の砦を諸方に蹴ちらしもみつぶしつゝ進んでいたが、やがて大高城にとりついて休養し、兵糧を入れて前進基地とすることが明かであつた。信長は大高城の前方左右に丸根、鷺津の二つの砦を構え、佐久間盛重と織田玄蕃げんぱにまもらせて、今川勢の進軍を待っていた。

今川勢は丸根、鷺津にせまってきた。その警報が櫛の歯をひくが如くに飛んでくるといふ夜、信長は軍評定は全然やらず、もっぱら世間話に夜ふかしをして、夜も更けた、もう

帰れ、と家来たちに帰宅させた。家老たちは城を出ると顔を見合せ、運の末には智慧の鏡もくもるといふが、バカ大将も今日が最後だと云つて、てんでに信長を嘲弄しながら夜道を歩いて帰つたのである。

あくる未明だ。今川勢が愈々鷺津丸根にとりついて攻撃をはじめたという注進がきた。そのとき信長は立ち上り、朗々とうたいながら敦盛あつもりの舞いをはじめた。

人間五十年

化転けてんのうちをくらぶれば

夢ゆめまぼろしの如くなり

一度生を得て

滅せぬものゝあるべきか

信長終生熱愛の謡であり舞であつた。彼の人生観ぐらい明快なものはない。この謡の文句で足りた。イノチをかけていたからだ。

謡が終えたが信長はまだ舞っていた。そして、舞いながら、ホラガイを吹け、具足をよこせ、そして舞いながら具足をつけ、立ちながら食事を取り、カブトをかぶり、なお舞いながらスルスルと出陣してしまつたのである。

家来たちはバカ大将に呆れ、帰宅して、ねむっている。ホラガイの音に目をさましても、すぐに、どうなるものではない。

出陣の信長につき従った家来はたった五騎であった。それでも彼は時々路上で馬をグルグル輪型に駆けまわらせて、家来たちの何人かゞ用意して、ついてくるのを待った。そして、熱田についたとき馬上六騎のほか雑兵二百余人になっていた。

熱田神宮に戦勝を祈って、さて出発という時に、信長は鞍によりかゝり、鼻^{はなうた}謡をうたつて、しばしばノロノロと号令もかけない。人の肩につるさがつて瓜を食いながら街を歩いたタワケ小僧の再現であった。

道の途中に、砦が落ち、守将の佐久間大学らが戦死した知らせがきた。道々砦から落ちてくる兵が加わり、総勢三千人ほどになった。今川軍の先鋒は大高城にはいつて兵糧を入れつゝあり、義元は主力を田楽^{でんがくはざま}狭間にあつめて、勝ち祝の謡をうなっていた。

信長はそこを奇襲した。今川義元は味方がケンカをはじめて同志討ちをしているのかと思っているうち、もう織田方の侍が飛びかゝって首を斬り落されていたのである。

信長の戦争は、いつもこんな風であった。家来の用意のとゝのうのを待たず、身のまわりのたった十人ぐらいで出陣するのは、この戦争に限ったことではない。家来たちは慌て

ふためき、信長に有無を云わさずひきずり廻され、ふと気がつくと戦争がすみ、戦争に勝っている。

筋が立たず、不合理に思われ、それで呆気なく勝っているから、信長は勝敗は運だという、その運を家来たちはマグレ当り、偶然のギョウコウ、そう見ることにしかできない。信長の偉さを合理的に理解することができないのだ。

信長にとっては、すべては組立てられていたのである。専門家とは、そういうものだ。兵隊や将軍はたくさんいる。大将も元帥も少くはない。けれども本当の専門家はその中に何人もいないものだ。芸術家でもそうだ。

信長にとっては、生れてから今川を倒す二十七年、見るもの、きくもの、すべてがそのために組み立てられた。そのためとは、今川だけのことではない。武田でも、上杉でも、よかった。すべて当面するそのものゝために組み立てられていたのだ、その組み立ては機械のように合理的なものであったが、家来たちには分らない。

特に家来たちは、信長の幼少からの常規を逸したバカさ加減に目をうたれているだけに、彼の成功にマグレアタリの不安を消すことが困難だった。

信長が父を失ったのは十六のときだ。父の葬儀の焼香に現れた信長は袴をはいていなか

った。髪は茶筍髪ちやせんがみ、つまりフンドシカツギのマゲだ、腰の太刀にはシメ縄がまいてある、悪太郎が川の釣から帰つてきたような姿で現れ、仏前へズカズカとすゝんで、クワツと抹香をつかんで仏前めがけて投げつけた。

死者は何ものであるか。白骨である。仏者の説く真理であり、万人の知る真理であるが、果して何人がその真相を冷然と直視しているであろうか。

悪童信長は街を歩きながら、栗をくい、餅をほおぼり、瓜にかぶりつき、人の肩によりかゝったり、つるさがったりしなければ歩かなかつた。呆れ果てたるバカ若殿、大ウツケ者、それが城下の定評であつた。

信長を育てた老臣平手 中なかつかさ務は諫言の遺書を残して自殺した。その忠誠、マゴコロは、さすがの悪童もハラワタをむしつたものだ。悪童は鷹狩で得た鳥を高々と虚空へ投げて、ジジイ、これを食べ、と言つた。水練の河辺に立つて、時々ふと涙ぐみ、川の水を足で蹴りあげて、ジジイ、これをのんでくれよ、と叫んだ。おのれを虚むなしうするものゝみが、悪党の魂に感動を与える。信長が秀吉の忠誠に見たものも、おのれを虚むなしうするマゴコロだった。家康の同盟に見たものも、それにちかい捨身の律義であつた。不逞の野望児信長は、せめて野望の一端がなる日まで、マゴコロのジジイを生かして、見せてやりたかつたであろう。

然し、悪童の狂態は、ジジイの諫死にかゝわらず、全然変りは見られなかった。

マゴコロのジジイは大ウツケ者のバカ若殿の未来を按じて、隣国の斎藤道三の娘をもらつて信長にめあわせた。斎藤と織田は美濃と尾張に隣り合せて、年来の仇敵であり、攻めたり攻められたり、互角に戦つて持ちこたえたが、バカ若殿の代になると、たちまちやられる憂いがある。ジジイはそれを怖れたのである。

斎藤道三も六十ぐらいのジジイであつた。これが又、当時天下に隠れもない大悪党の張本人の一人であつた。かの老蜷は天下の執政である、この色男のジジイは大名である。地位に多少のヒラキはあるが、悪逆無道の張本人と申せば、当時誰でもこの二人のジジイに指を折り、その三本目は折らなかつたものである。

浪士の家に生れ、幼少の折、京都の妙覚寺へ坊主にだされた。花のような美童で、智慮かしこく、師の僧に愛され、たちまち仏教の奥儀をきわめて、弁舌のさわやかなこと、若年にして名僧と称されるに至つた。

二歳年少の弟弟子おとうとでしに南陽房という名門の子弟がいて、これが又、学識高く、若手にして諸学に通じる名僧で、二人は非常に仲がよかったが、道三は坊主がイヤになって、還俗し、女房をもらつて、油の行商をはじめた。

辻に立ち、人を集めて、得意のオシャベリで嘘八百、つまりテキヤであるが、舌でだましておいて、一文銭をとりだす。サア、サア、お立会い、へたな商人はジョウゴについて油をうる、腕も悪いが油も悪い。タアラ、タラタラと一とすじの糸となって流れでる油、これが、よい油だよ。さあ、お立会い。拙者の油は、よい油だ。よろしいか。拙者は油をヒシャクにくむ。それを、こうして、イレモノへつぐ。タアラリ、タアラリ一とすじの糸、ごらん、穴アキの一文銭の穴を通して、タアラリ、タアラリ。まちがっても、穴のフチに油がかゝつたら、ゼニはいらん。よく、みな、フチに一滴たりとも、かゝるか、かゝらないか、そうれ、みな、タアラリ、タアラリ。

手練の妙、穴を通して、フチへ油のかゝつたことがない。大評判、油は一文銭の油売りの油にかぎるとなつて、たちまちのうちに金持ちになつた。

油を売りながら兵法に心をそゝぎ、昔の坊主仲間の南陽房にたよつて、美濃の長井の家来となり、長井を殺し、長井の主人の土岐氏から髻をもらつて、その髻を毒殺、土岐氏を追ひだして、美濃一国の主人となつて、岐阜稲葉山の城によつた。

主をきり髻をころすは身のをはり、昔は長田、今は山城ぬしというのが、当時の落首だ。山城とは、斎藤山城入道道三のことだ。微罪の罪人を牛裂

きにしたり、釜で煮殺したり、おまけに、その釜を、煮られる者の女房や親兄弟に火をたかせた。釜ゆでの元祖は石川五右衛門ではなかったのである。

悪逆陰険の曲者だったが、兵法は達者であった。信長同様、長槍の利をさと、鉄炮の利器たるを知って、炮術に心をくだいた。明智光秀は炮術の大家であるが、斎藤道三について学んだのだと云われている。

こういう曲者が隣国にいて、信長の父は、隙をねらって攻めたり、攻められたり、年来の敵手であるから、信長のモリ役の平手中務は年少の信長に道三の娘をめあわして、後日にそなえておいた。

道三は政略結婚、結構。相手がその気なら、こだわることはない。聶の一匹二匹、ひねり殺すに、こだわる気持が元々ないのだ。

けれども、道三は、さすがに悪党のカンである、大ウツケ者、バカ若殿。この御仁の代には必ず家がつぶれる、という、大評判。ほかならぬ織田家の家来の定説なのだ。然し、さすがにこの悪党は、世の定説のごときものを、そのまゝ、ウノミにしなかった。

人があの小僧はバカだというたびに、ほんとかな、なぜだ、ときいた。そして、バカではあるまい、と言うのであった。

フンドシカツギのマゲをゆい、ユカタの着流しに、片ハダぬいで、腰に火ウチ袋やヒョウタンを七ツも八ツもぶらさげて、人の肩につるさがって、瓜をほおぼり、餅をかじりながら道を歩いているという。なるほど、行儀は、若殿らしいものではない。オヤジの葬式に、ふだん着の姿でチョコくと現れ、抹香をクワツとつかんで投げつけるとはバカだ。けれども水練は河童の如しというではないか。荒れ馬を縦横に駆け苦しめて乗り殺すほどの達人だというではないか。炮術に練達し、長柄の槍の利得を見ぬいているというではないか。腕ツ節の強さだけでも、曲者ではないか。

然し、誰一人、道三の意見に賛成しない。アハハ、とんでもない、あれはマギレもない大バカ野郎にきまっています、とみんながみんな、言う。

そうか、とにかく、実物を見なくちゃ分らない、ひとつ、バカ智をよびだして、なぶつてやろう、と、色男の悪党ジジイがニヤニヤ思いついて、何月何日、富田の正徳寺で会見致そうと使者をたてた。

そのとき、信長、十九である。智をだましてヒネリ殺すぐらい平氣の悪党ジジイのやることであるが、信長ちツとも、こだわらない。即座に承知の返事をした。

道三は、バカか、バカでないか、実物判断というのが、そもそもの着想であつたが、み

んなタワケの大バカ野郎と言いたて、きめこんでいるから、彼も自然、バカ聲をからかつてやれ、という氣持が強くなった。

道三は富田の正徳寺へ先着し、わざと古老の威儀いかめしいオヤジどもの侍ばかり七八百人、いずれも高々とピンと張った袴^{かみしも}、袴、いと物々しく、お寺の縁へズラリ並ばせた。礼儀知らずのバカ小僧が、この前を通りかゝる。物々しいシカメツ面の大僧ばかりが、目の玉をむいて、ズラリと威儀をはって居流れているから、バカ聲も仰天しやがるだろうという趣向であつた。

こうしておいて、道三は町はずれの小さな家にかくれ、そこからのぞいて、信長の通りかゝるのを待っていた。

信長の一行がやってきた。サキブレにつゞいて、お供が七八百、それに三間半の朱槍五百本、弓と鉄炮五百挺、いずれも、しかるべき立派なものだ。

ところが、バカ聲が、ひどすぎる。かねて噂の通り、人の肩につるさがつて瓜を食いながら城下を歩いている時と、まったく同じ姿なのだ。

頭は例のフンドシカツギである。萌黄のヒモで髪をグルグルたばねてある。袴や袴どころの話じゃない。ユカタの着流しで、おまけに肌ぬぎだ。腰の大小はシメ縄でグルグルと

まいてあり、肌ぬぎの腕にも縄をまきつけて、これが腕貫うでぬきのつもりらしい。腰のまわりに、火ウチ袋ヒヨウタン七ツ八ツぶらさげ、ちようど猿廻しである。乗馬の心得で、虎の皮と豹の皮を継ぎまぜて造った半袴をはいていた。

この一行が信長の休憩にあてられた寺へはいると、道三はバカの正体見とゞけて、何くわぬ顔、自分方の寺へもどった。

ところが、道三も一パイくわされてしまったのだ。道三ばかりじゃなかった。信長の家来がキモをつぶした。

休憩所へはいると、すぐさま屏風をひきまわして、信長は立派な髪にゆい直し、いつ染めておいたか秘書官の太田牛一もしらない長袴をはき、これ又誰も知らないうちに拵えた小刀をさし、美事な殿様姿で現れたものだ。お供の面々、誰一人、今まで夢に見たこともない姿であった。

信長はスルスルとお堂へすすんだ。縁を上ると、さア、こうお出でなさいまし、と案内の侍臣が奥をさしたが、信長は知らぬ顔、目玉をむいた大僧どもの陳列然と居流れる前をスーと通りぬけて、縁側の柱にもたれてマヌケ面である。

信長がしばらく、柱にもたれていると、道三が屏風をおしのけて、出てきた。道三も知

らんフリをしている。

侍臣が信長に歩みより、こちらが斎藤山城殿でござります、というと、柱にもたれた信長は、

「デアルカ」

と言った。

それから敷居の内へはいつて、道三に挨拶をのべ、ともに座敷へ通つて、盃を交し、湯づけをたべ、いと尋常に對面を終わり、又、あいましようと云つて別れた。

道三は二十町ほど見送つたが、信長方の槍が自分方より長いのに興をさました様子で、信長と別れてからはウンともスンとも言わなかつた。

黙々と歩いて、アカナヘという地名の処へきたとき、猪子兵介が道三に向つて、

「どうですか。やつぱり、あいつ、バカでしょうが」

と言うと、

「さればさ。無念残念のことながら、今にオレの子供のバカどもが、信長の馬のクツワをとるようになるにきまっていやがる」

と道三は答えた。彼の仏頂ヅラは当分とけそうもなかつたのである。

彼はトコトンまで信長に翻弄されたことを知った。自分の方が翻弄するつもりでいただけ、その後味はひどかった。道三は信長の人物を素直に見ぬくことができたが、信長の家来どもは素直ではなかったから、彼らには、やっぱり主人が分らなかったのだ。

彼らは信長の殿様然たる風姿をはじめて見て、さては敵をあぎむくための狂態であったかなどと考えて、然し、それで、主人の全部をわりきること出来なかった。

敵をあぎむくためなど、信長はそんなことは凡そ考えていなかった。彼は人をくつていた。人を人とも思わなかった。世間の思惑、世間ていは、問題とするところでない。フンドシカツギのマゲが便利であっただけで、又歩きながら、瓜がくいたかっただけのことだ。立派な壮年の大将となっても、冬空にフンドシ一つで、短刀くわえて、大蛇見物に池の中へプクプクもぐりこむ信長なのである。

論理の発想の根本が違っているから、信長という明快きわまる合理的な人間像を、その家来たちは、いつまでも正当に理解することができなかったのである。

清洲近在の天永寺の天沢という坊主が関東へ下向の途中、甲斐を通った。信長領地の坊主がきたときいて、武田信玄は、天沢を自分の館へよびよせた。

信玄の知りたいことは、信長とはどんな男か、ということだった。信長は日々どんな生

活をしているか、それを一々、残るところなくきかせよ、というのが、信玄の天沢への注問であつた。

そこで、朝晩馬にのること、橋本一巴に鉄炮を、市川大介に弓を、平田三位に兵法を習い、それが日課で、そのほかに、しよっちゅう鷹狩をやっています、と有りていに答えた。
「ふうん。鷹狩が好きか、そのほかに、信長の趣味はなんだ」

「舞と小唄です」

「舞と小唄か。幸若大夫でも教えに行くのか」

「いゝえ、清洲の町人の友閑というのが先生で、敦盛をたった一番、それ以外は舞いません。人間五十年、化転の内をくらぶれば、夢幻のごとなり、一度生を得て、滅せぬ者のあるべきぞ、こゝのところを自分で謡つて舞うことだけが好きのようです。そのほかに、小唄を一つ、好きで日ごろ唄われるということですよ」

「ほゝう。変つたものが、好きだな」

そう笑つた信玄は、然し、大マジメであつた。

「それは、どんな小唄だ」

「死のふは」いちじよう定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりをこすよの、こういう小唄で

「ございます」

「フシをつけて、それを、まねてみせてくれ」

「私はまだフシをつけて小唄をうたったことがございません。なにぶん坊主のことで、とんと不粋でございます」

「いや、いや。かまわぬ。お前が耳できいたように、ともかく、まねをしてみよ」

天沢和尚、仕方がないから、まねをして、トンチンカンな小唄をうたったが、信玄はそれをジツときいていた。

それから、信長の鷹狩のことをきく、何人ぐらいの人数で、どんなところで、どんな方法でやるか、逐一きいた。

そこで天沢は答えた。信長の鷹狩には、先ず二十人の鳥見の衆というのがおつて、この者共が二里三里先へ出て、あそこの村に鷹がいた、こゝの在所に鶴がいた、と見つけるたびに、一羽につき一人を見張りに残しておいて、一人が注進に駆けもどる。

すると信長は弓三人、槍三人の人数を供に、又、馬に乗った山口太郎兵衛という者をひきつれて、その現場へかけつける。

馬乗の太郎兵衛がワラで擬装して鳥のまわりをソロリ／＼と乗りまわして次第に近づく

と、信長は鷹を拳に、馬の陰にかくして近かより、つと走りて、鷹をとばせる。すると向い待という役があつて、この連中は農夫のマネをして、畑を耕すフリをして待っており、鷹が鳥にとりついて組み合う時、鳥をおさえるのである。

「信長公は達者ですから、御自身度々鳥をとらえられます」

信玄は深くうなずいて、

「よくわかつた。あの仁が戦争巧者なのも、道理である」

と、色々納得した様子であつた。そこで天沢がイトマをつけると、又帰りの道にゼヒ立ちよつて行くがよい、と、信玄は機嫌よく、いたわつてくれた。

もとより、信玄にとつても、信長は大いに疑問の大將であつた。

彼は天沢の話から、果して正確な信長像を得たであろうか。天沢の話は、たしかに信長像の要点にふれてゐた。信長の独特な狩の方法、信長愛あいしやう誦よみの唄、信長を解く鍵の一つが、たしかにそこにはあるのである。それを特に指定して逐一きゝだした信玄が、然し、今日我々が歴史的に完了した姿に於て信長の評価をなしうるように、彼の人間像をつかみ得たか、然し、信玄には信長を正解し得ない盲点があつた。自ら一人フンドシ一つで大蛇見物にもぐりこむような好奇心は、然しそれが捨身の度胸で行われている点に於て、信玄

も舌をまき、決して輕蔑はしないであろう。けれども、それは信玄にとって所詮好奇心でしかなかった。世に最も稀な、最も高い、科学する魂であること、それが信長の全部であるということを、信玄は理解することができなかった。蛇に食われて死んでもよかった。武士たる者が、戦場にはるべきイノチを、蛇にかまれて死ぬとは！ 然し、絶対者に於て、戦死と、蛇にかまれて死ぬことの差が何物であるか。大蛇を見たい実証精神が高い尊いというのではない。天下統一が何物であるか。野心の如きが何物であるか。実証精神の如きが何物であるか。一皮めくれば、人間は、たゞ、死のうは一定。それだけのことではないか。

出家遁世者の最後の哲理は、信長の身に即していた。しかし、出家遁世はせぬ。戦争に浮身をやつし、天下一に浮身をやつしているだけのことだ。一皮めくれば、死のうは一定、それが彼の全部であり、天下の如きは何物でもなかった。彼はいつ死んでもよかったし、いつまで生きていてもよかったのである。そして、いつ死んでもよかった信長は、その故に生とは何ものであるか、最もよく知っていた。生きるとは、全的な遊びである。すべての苦心経営を、すべての勘考を、すべての魂を、イノチをかけた遊びである。あらゆる時間が、それだけである。

信長は悪魔であつた。なぜなら、最後の哲理に完ペキに即した人であつたから。

然し、この悪魔は、殆ど好色なところがなかった。さのみ珍味佳肴も欲せず、金殿玉樓の慾もなかった。モラルによつて、そうなのではない。その必要を感じていなかっただけのことだ。

老蝮は、悪逆無道であると共に、好色だつた。彼は数名の美女と寢床でたわむれながら、侍臣をよんで天下の政務を執つていた。これもモラルのせいではない。その必要のせいである。悪魔にとっては、それだけだつた。信長の謹厳も、老蝮の助平も、全然同じことにすぎなかつた。

信長は、信玄のアトトリの勝頼に自分の養女をもらつてもらつて、しきりにゴキゲンをとりむすんでいた。戦争達者な信玄坊主と、好んで争うことはない。好んで不利をもとめることは、いらないことだ。信長はゴキゲンをとりむすぶぐらいは平チャラだつた。

すると、信長は綸旨をもらい、その翌年は老蝮から降参だか友情だかわけのわからぬ内通をうけ、そして義昭の依頼をうけた。

信長はすぐさま義昭をむかえて、西庄、立正寺で対面、たゞちに京都奪還の軍備をたて、シャニム二進撃、たちまち京都へとびこんでしまった。

あんまり仕事が早すぎるので、老蝮もめんくらった。あれだけ内通してかねて友情をみせてあるのに、挨拶なしに、足もとから鳥がとびたつように、いきなり膝もとへ押しよせてきたから、慌て、頭から湯気をたて、ブウブウ言いながら、防いでみたが、この老蝮は元々戦争は強くない。なんとなくハメ手を用い、口先でごまかし、それで天下はとったけれども、戦争すると、あんまり勝ったことはない。ヤケクソに大仏殿へ夜討ちをかけて火をかけて、ブザマなことをやりながら、やつぱり負けて逃げだしている老蝮であった。いつも負けて、それから口先でごまかして、ウヤムヤにすましてしまうのであった。

いつものことだが、老蝮の逃げ足だけは見事であった。逃げるにかけては、危なげというものがない。兵をまとめてサツと大和へにげのびて、神妙に降参した。

信長について入洛^{じゅらく}し、將軍の位についた義昭は、万端信長の意にまかして、いかにも信長の恩義を徳とするフリをしてみせたが、老蝮の処刑ばかりは、さすがに大いに言い張った。然し、信長は、とりあわない。

老蝮は命が助かったばかりではなく、信貴^{しぎ}の本城をそのまゝ許され、大和一国はその切りとりに任かされたのである。

悪魔同志の友情であった。老蝮はさつそく御礼に参上して、最も熱心に、そのウンチク

をかたむけて、あれかれと政治むきの助言をしていた。この不思議の友情は、然し、大いに清潔なものであったと云わねばならぬ。人間どもには分らない謎なのである。そもこの友情はいかに育ち、いかに破れるに至るであろうか。

（未完）

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「季刊作品 第一号」創芸社

1948（昭和23）年8月10日発行

初出：「季刊作品 第一号」創芸社

1948（昭和23）年8月10日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：土井 亨

2006年7月11日作成

2013年6月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

織田信長

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>